

欧州、とくにフランスから見た 現在の世界と日本



元NHK欧州総局長・
パリ日本文化会館初代館長

磯村 尚徳氏に聞く

世界情勢が大きく変動し、歴史的な転換点を迎えているといわれる。ところが、日本ではそうした国際政治・経済の情報源が、英語圏の米国やイギリスに偏っているように見受けられる。そこで、NHKで欧州総局長、報道局長を歴任し、フランスに長く滞在させていた磯村尚徳氏から、欧州文明、特にフランスのものの見方、日本文化との共通性などについてお聞きした。

親子二代にわたり、 フランス、パリと深い縁

大山 日仏メディア交流協会のホームページに、磯村会長のメッセージとして、「2005年、10年ぶりに欧州から帰国し、日本人が、ものの見方、考え方、それに挙措にいたるまでアメリカ化している事実に驚きました」、「歴史の厚みとアメリカ的善悪、二項対立では解き得ぬヨーロッパの世界を知るだけに、フランス的世界観を、モードに至るまで幅広くご紹介したい」と書かれています。そこで今回はフランスに長く滞在されていた磯村さんに、欧州、とくにフランスから見た現在の世界の動き、また日ごろ感じておられる日本とフランスの共通性などについて、お話しただければと思います。

まず、フランスとのつながりを中心に、ご自身の経歴からお話しいただけますか。

磯村 私どもは親子二代にわたって、フランスと縁があります。父は軍人で戦死しました。が、大使館付き武官としてパリとイスタンブールに駐在していました。このため、私は7歳から9歳までヨーロッパにおりました。不思議な縁で妻の家もパリとは縁がありました。東京大



Interviewer
京都総合経済研究所
調査部 執行役員部長
大山 陽久



NHKのスタジオで。女性は、アシスタントだったフランスTVのキャスター、クリスティヌ・オクランさん

学法学部長を務めた義父の鈴木竹雄がドイツで商法・会社法を研究しているときに、義母は大のフランス好きで、ドイツではなくフランスにいたそうです。というわけで、親子二代にわたるフランス好きです。そんな事情もあり、実は私は小学校5年生まで日本語ができませんでした。NHKに入ったときも、当時、NHKにはフランス語ができる人がいなかったため、恒例である新人の地方局勤務から免れ、いきなり外信部に配属されました。1958年には特派員

としてフランスに派遣され、4年間滞在しました。その後、ワシントンに7年間駐在し、ワシントン支局長を経て外信部長に、さらに1974年にはNHKテレビ「ニュースセンター9時」のキャスターも経験しました。そして3年後には番組を降りてヨーロッパ総局長に就き、3度目のパリ行きとなりました。NHKは他のマスコミ各社がロンドンに欧州の本拠地を置くなかで、唯一パリに本拠地を置いています。幸いなことに、ヨーロッパはロンドンからではなく、大陸から見なければ駄目ということ

がわかっていて人たちがいたわけですね。

こうしてフランスとの深い縁があつて、退職後には日本で最初の在外文化発信施設であるパリ日本文化会館の初代館長に就任しました。この施設は日仏の官民がおカネを出し合い、フランス政府から提供いただいた土地に約120億円をかけて建設したものです。

大山 磯村さんはフランスだけでなくワシントンにも7年間駐在されていたのですね。

磯村 日本では戦前、外交官というと欧州がメジャーで、米国のマイナーという格付けでした。ですから、欧州のことはある程度知っていましたが、当の戦争相手である米国のことはあまりよく知らなかったということになりました。ところが、戦後はそれが逆になってしまい、外務省でいえば、英語で外交官試験を受けた人の最終の上りのポストが駐米大使になりました。マスメディアでいうと、ワシントン経験者でなければ、普通は外信部長や報道局長のポスト

には就けません。私は、フランス屋のつもりでいましたから、米国は性に合わなくてワシントンにいた頃は毎日のように「帰りたい」と思っていました(笑)。

権威、伝統を重んじる ド・ゴール将軍が再評価される

大山 最近、世界各地で生じている変化については、どのようにご覧になっていますか。

磯村 一言でいえば、政治が極度に劣化していると思います。なかでもいちばん甚だしいのは、世界一の強国である米国に、ドナルド・トランプ大統領が就任したことです。日本はいろいろお世話になっているので、あまり米国の悪口は言えませんが、欧州のマスコミの口調は厳しく、フランスのエクスペレス誌は一国の大統領を指して「愚かな人が核のボタンを握る立場に立つたことが恐ろしい」とまで言っています。著名なイギリス作家ケン・フォレット氏は「パックス・ブリタニカ、パックス・アメリカーナの英米黄金の500年間がトランプ大統領によって幕を閉じる」と断言しています。

そうしたトランプ大統領に代表されるポピュリズムの弊害が欧州でも強くなり、歴史の大きな節目を迎えているように思います。とくに、かつて旧ソ連の支配下にあつて現在はEUに加盟しているハンガリー、ポーランド、チェコといった国々が危いですね。ソ連が崩壊し、その軀から自由になりEUに入ったものの、民主主義とは縁遠い50年間をすごしてきたので、劣化しやすいでしょう。こうした傾向は、国民選



磯村 尚徳 (いそむら ひさのり)

1929年東京生まれ。学習院大学卒業。1953年NHK入局。38年間の経歴の半分を海外で過ごし、ワシントン支局長、欧州総局長、報道局長、専務理事待遇特別主幹などを務める。この間、1974年から「ニュースセンター9時」の編集長兼キャスターを務め、「ミスターNHK」と呼ばれる。1995年～2005年パリ日本文化会館初代館長。ユネスコ事務総長特別顧問、TMF（日仏メディア交流協会）会長その他の日欧関係団体を通じ、日欧の架け橋として活動している。これらにより、1996年フランス大統領より「レジオンドヌール勲章オフィシエ賞」・国家功労賞、「芸術文芸勲章コマンドゥール賞」などを受賞。また、日本記者クラブ賞・上田ヴォーン国際記者賞などを受賞。2016年フランス最高学府エコール・ポリテクニクより名誉ポリテクニシアンに任命され、ナポレオン帽（ピコルヌ）を授かる。著書は、「ちよっとキザですが」シリーズ（講談社）など20冊を超える。

「ヨーロッパ・ルネッサンス」で進む欧州統合の動き

大山 マクロン大統領の就任後、フランスが再び欧州再興に向けてリーダーシップを発揮しているように見える局面が増えてきているようにも見えますが、欧州統合とはそもそもどのような考え方に基づいているものなのでしょうか。

磯村 1958年、私は若い特派員としてフランスに派遣されましたが、その前年の1957年にローマ条約といって、仏・独・伊・オランダ・ルクセンブルグ・ベルギーの6か国が欧州経済共同体（EEC）の創設に調印しました。仏独を中心に欧州大陸の6か国が集まって、米ソという大国に対し、第三勢力であるヨーロッパ合衆国を築いていこうというものです。欧州統合の理想は永久に戦争をしないということにあります。赴任した年が幸運なことにその元年にあたり、取材を重ねました。

よく知られているように、フランスとドイツは、資源を巡る争いに端を発して二度の世界大戦で敵味方に分かれて戦うことになりましたが、国境を接する両国の間ではお互いに国際結婚している人が多く、多くの親族を失った両国民の間で、もう二度とこんな悲惨な目にはあいたくないとの思いが強まりました。先行き二度と戦争を起こさないようにするために、経済を密接に結びつけ、相手を攻撃すると自分の経済にも大きなダメージが生じるようにすればよいのではないかとの考えから、まず1952年に欧州石炭鉄鋼共同体が結成され、それがさらに、

ちよっとネクタイをしていたのが、カジユアルなものに変わり、その後50年間、カジユアルな文化が支配してきました。ところが、ここに来て、こうした価値観や文化が再び変化しはじめています。たとえばフランス人は大革命を起こし、自由・平等・博愛を掲げました。そこま

挙も議会もあるという建前の民主主義国家であるロシアやエジプトなどにも及び、世界中に広がっています。

大山 そのように世界情勢が変化する中で、フランスも変化してきているのでしょうか。

磯村 フランスでも現在、価値観や文化面での変化が訪れています。私が最初にフランスに行った頃は、「カトリック教会の長女」といわれるくらいカトリック教会が強かった。それから国民の3人に1人は共産党員といわれるくらいに共産党も強かった。ところが、1968年の五月革命で大学や共産党の権威が失墜しました。労働総同盟という組合が労働貴族になってしまい、学生たちの信頼を失いました。また離婚などに厳しい教会も、離婚するのも同棲するのも自由だという性革命が浸透し、ほぼ同時期に失墜しました。こうした権威の失墜は日本でも米国でも世界共通の現象で、ファッションも、き

では良かったのですが、コンコルド広場で王様を処刑してしまいました。世論調査をみると、フランス人の82%が王制は悪いところもあったが、国王を処刑したのは間違いだと言っています。王制の権威や伝統を重んじるということですが、それから、ド・ゴール將軍がいま、世論調査でもあらゆる階層の人たちから慕われています。なぜなら、彼は清貧で、しかも右でも左でもなく国のために尽くし、大統領としての権威を示したと、ある種ノスタルジックに語られているのです。そこをうまく突いたのが、現在のマクロン大統領です。直前のオランド大統領はエリゼ宮を抜け出し女性と密会し、その前のサルコジ大統領は何度も離婚を繰り返しています。一方、マクロン大統領は、25歳年長の奥さんとその連れ子との間で豊かな家庭生活を送っていることがマスコミで再三報じられています。

EU、欧州共同体（EC）、欧州連合（EU）へと発展、近年では共通通貨ユーロの導入、EU大統領も実現し、今は商法の統一や、財政や銀行監督も統一に向けて検討が進んでいます。

大山 EU統合の理念は、単なる経済協力だけでなく、安全保障という考え方があつたわけですね。

磯村 ギリシャやイタリアの経済がおかしくなると、マスコミや市場はすぐに「EU離脱」「EU崩壊」と騒ぎますが、実はEUの原点はこうした安全保障にあるので、世間一般が考えるほど、EUは簡単には崩壊しないのです。

ところで、日本ではご存じない方が多いかもしれませんが、EUCが創設された5年後の1963年には、先行き仏独が一つの国になることをも展望した仏独協力条約（エリゼ条約）が調印されました。その目玉は、青少年交流事業の創設で、1963年の条約締結から現在までに延べ2500万人もの青少年が仏独の間を行き来しています。仏独どちらかの大学入学資格試験に合格すれば、どちらの国でも通用するという制度です。また、ARTE（アルテ）という仏独2か国語による放送局も創設され、フランス陸軍とドイツ連邦陸軍による合同旅団も結成されています。さらには、歴史認識を共通化するために、仏独の高校生はなんと共通の歴史教科書で学んでいるのです。その条約締結から55年目にあたる本年、実はそれをさらに強化した改正新条約が締結されました。それをもとに、現在、商法、会社法を統一するプロジェクトが進められており、まさに「一つの合衆国」となることを目指しています。こうした動きは、欧州統合の原点に帰るといふ意味で「ヨーロッパ

パ・ルネッサンス」と言われており、仏独首脳のマクロン、メルケルの頭文字を採って「MM革命」とも呼ばれています。日本のメディアは米英にニュースソースが偏っていて、こうした重要な動きがきちんと伝えられていません。

欧州の中心は大陸諸国。イギリスの勘違いから起きたブレグジット

大山 EU統合については、「深化」と「拡大」の同時進行という言葉をよく耳にしますが、これはどういう意味でしょうか。

磯村 EUは、いま申し上げたような意味で中核国間での「深化」を進めるとともに、ロシアとの戦争を防ぐために緩衝地帯にある東欧諸国の国々を取り込んでいくことも同時に進めており、これがEUの「拡大」です。EUは28か国の大所帯ですから、当然、仲の良い国、悪い国があります。だから、もめごともしこり、いままにもEUは崩壊するとまことしやかに言われます。そうしたなかで、私が忘れられないのはミッテラン大統領から蔵相に起用されたジャック・ドロール氏の言葉です。「磯村君、これからもEUにはいろいろ問題が起きるが、一つだけ忘れない

でいてほしいことは、結局、何かあつたときにEUを支配するのはギリシャ・ローマ以来の共通の伝統とキリスト教のバトスと情念なのだということ。それがあつた限り、バラバラにはならない」と。普段、ビジネスの現場などでは顔を出しませんが危機を迎えると、それが欧州を團結させる。旧東欧諸国などは永遠に一緒であるかどうかわかりませんが、中核国はバトスを持ち続けると思っています。

大山 そのように全体として欧州統合に向けて進んでいく中で、英国の離脱はどのように位置づけたいのでしょうか。

磯村 日本人は欧州のことをやや勘違いしていることが多いのですが、欧州とは、もともとコンチネンタル、すなわち欧州大陸のことを指している、フランスとドイツがその中核です。英国は、大陸から離れた島国にすぎず、したが



2017年6月に着任したローラン・ピック駐日フランス大使と談笑する磯村氏



って大陸諸国の動きとは少し距離を置いていることが少なくありません。たとえば、移民の問題についても、中東からの移民が流入してきて深刻な問題となっている陸続きの大陸諸国に比べて、海を隔てている英国は危機感が薄いという違いがあります。英国のチャールズ首相は、ヨーロッパ主義者といわれ「ヨーロッパ合衆国」を提唱しましたが、同時に「英国は決してそれには入らない (never in)」と言っていました。また、私の英国の友人は、ロンドンからパリに行くときに「欧州に行く」という表現を使いますが、これは英国は欧州だと思っていないからにはかなりません (笑)。

このように、欧州運営の中核となっているのはフランスとドイツですが、仏独の間に意見対立がある場合には、英国がどちらの意見に近いかにより、いわば三角関係の中での多数決のような形で世論が形成されていきます。このため

英国は、自分が常に欧州を動かせるという勘違いをしたのではないでしょう。それがブレグジット (Brexit、英国のEU離脱) です。EU統合の理念など、もともと仏独間に意見の対立がない分野については、英国が異を唱えても変えられないのに、それにもかかわらず「英国の主張を聞き入れないなら脱退するぞ」と脅したので、「どうぞご自由に」ということになったわけです。ブレグジットの国民投票で結果が出たときに、フラン

スの元大蔵大臣であったクリスチャン・ソールヌ氏から、メールを頂きましたが、「英国というブレキが外れたので、これから欧州はうまくいく」と書かれていました。

なお、今回のブレグジットで、いちばん大慌てしたのは日本だといわれています。なぜかという点、日本人は欧州は英国だと思っていたからです。日本企業は英語で情報を取ろうと思うから、欧州の拠点は英国に置いています。でも、欧州大陸の中で、英語を母国語としている国は、実は一つもないのです。

短期的な利益を追求する英米、 中長期的な利益を追求する大陸

大山 企業経営という観点で、日本はアングロサクソン系の国々を見本にすることが多いといわれていますが、欧州大陸のやり方で参考とな

る点などはありますか。

磯村 英米がシティ、ウォールストリートを中心とするマネー資本主義であるとする、ドイツの場合はライン型資本主義といって、必ずしも株主、株価だけに重点を置かず、むしろ社員にも手厚く報いるような経営をしています。たとえばフォルクスワーゲンなどでは共同決定方式といって、労組の代表が経営に参画しています。エマニュエル・トッドという歴史人口学者・家族人類学者が、人類型から見るとマネー資本主義に強いのがアングロサクソンと中国人で、モノづくりに強いのはドイツ人、スウェーデン人、日本人だと言っています。

英米の資本主義は短期的な利益を追求し、株主利益の最大化を図るといった目先の目標にとられ、中長期的な視点が乏しいように感じられます。一方、欧州はゆったりと流れるように、中長期的な利益を追求していて、日本人に合っているように思います。もう一つは全員参加型で、いろいろなステークホルダーを大事にし、労組もうまく取り込んで改善につなげようとする姿勢もあります。日産自動車とルノーが合併した時には、ゴーン社長の下で、中間管理職も再建のアイデアを求められ、立場を尊重されました。米国企業に買収されていたら直ちに首切りということになりかねませんでした。また、トヨタが北フランスに工場進出した際には、当初冷やかだったフランス人労組は、労使一体となった経営に感激し、その後工場拡張式典を行った際には大統領も駆けつけたほか、労組代表も涙ぐんで感謝の意を述べるなど、フランスと日本の企業経営には気質が通じるところがあ

るように感じます。

このように、欧州のものの考え方にはフロアよりもストックという発想が強いように思えます。私はNHKの「近代国家の像」という番組でロックフェラー邸を取材したことがあります。が、敷地の中に9ホールのゴルフコースであるのに、家の中の家具や調度類は本当に貧相でした。一方、フランスで中小企業経営者の自宅と呼ばれていくと、ピカソからラファエロまで書画骨董がストックされています。NHKの番組で金の延べ棒をストックしているフランスの農家を取材したことがあります。仮想通貨を追いかけ、目先のバブリーな動きに一喜一憂する文化とは大きく違います。

今年が京都市・パリ市の友好姉妹都市60周年

大山 経済以外でもフランスと日本は似ている

ところがありますか。日本人はフランスに憧れがあるし、フランス人も日本のものが好きなのうに感じます。

磯村 私はネオジャポニズムと言っています。若い人たちの間で日本のマンガ、アニメ、テレビゲームが大変な人気で、フランスのマンガ発行部数は日本に次いで断トツの2位です。毎年夏に開催される「ジャパンエキスポ」にはアニメやテレビゲームが展示され、フランスを中心に20万人以上の若者が訪れます。それから私は18年間、エコール・ポリテクニクというフランスの最高学府で教えていますが、第2外国語として中国語より日本語をとる学生が多い。若者のそうした日本文化への憧れの下地を作っているのが、マンガに代表される日本の大衆文化です。

文化というと、フランス人は京都のものが好きですね。日本好きのフランス人に、「京都のような素晴らしい都があるのにどうして東京に遷都したのか」と聞かれること

ともあります。東京は活気がある街ですが、ニューヨークと同様に面白くないと言うのです。フランスと京都に関するあるシンポジウムでフランスの大学の先生が、外交官で詩人のポール・クロードル氏の言葉を引用して、「京都とフランスには相容る魂みだいのものがある」と言っていました。先ほどお話ししたパリ日本文化会館の前に小さな

広場がありまして、そこは「京都広場」と命名されています。

今年の日仏友好160周年ということで、7月から数か月にもわたって、パリで「ジャポニスム2018」という日仏交流の大イベントが開かれることとなり、私もサポーター役として渡仏します。この企画は、国際交流基金のホームページに掲載されていますが、交流イベントの公式企画説明文だけで62ページもある大イベントです。もしフランスに行かれる方があれば是非お立ち寄りください。

大山 実はパリ市と京都市とは、友好姉妹都市提携を結んでいて、こちらも今年でちょうど60周年を迎えます。

磯村 京都市と友好姉妹都市提携が結ばれたのは1958年ですが、フランス側（パリ市）が非常に熱心だったと聞いています。実は、その後、1982年に、鈴木俊一都知事（当時）が日本好きのシラク市長に、東京と姉妹都市を、と言ってきたことがあったそうです。ところが、姉妹都市で二股をかけるわけにはいかないので、東京とはそれに準じる友好都市ということで納得して頂いたようです（笑）。

また、私は、毎年1回はパリ日本文化会館の運営を議論する審議委員会に出席しています。が、フランスからぜひ京都の方をメンバーに加えてほしいという強い要望があり、3年前から堀場製作所の堀場厚会長にメンバーになって頂いています。

大山 本日は欧州、とくにフランスを中心に貴重なお話をうかがうことができました。たいへんありがとうございます。



日本人としては異例の名誉ポリテクニシャンに任命されて授かったナポレオン帽(ビコルヌ)をかぶる磯村氏